

会 議 録

会議の名称	令和7年度第1回川越市オーバーツーリズム対策懇談会
開催日時	令和7年7月2日（水） 16時00分 開会 ・ 17時30分 閉会
開催場所	川越市役所7階 第1・5委員会室
出席者	別紙「出席者一覧」参照
事務局（観光課）職員氏名	課長 榎本 学、副課長 関根 英昭、館長 横山 大造 副主幹 加藤 剛史、主査 新井 努、主査 山田 英司 主任 仲田 由香里、主任 中村 翔大、主事 小林 祥大
会議次第	1 開会 2 あいさつ 3 報告事項 ・ ゴールデンウィークにおける観光客増加対応について ・ 個別協議について 4 議題 （1）令和7年度のオーバーツーリズム対策事業について （2）各団体のオーバーツーリズム対策の取組みについて 5 その他 6 閉会
配布資料	次第・出席者名簿 会場図 資料1：川越市オーバーツーリズム対策事業

議題・発言内容・決定事項

議事は、会議次第に沿って進行された。
討議の概要は、以下のとおり。

報告事項

- ・ ゴールデンウィークにおける観光客増加対応について
- ・ 個別協議について

資料１「川越市オーバーツーリズム対策事業」を用いて説明
(事務局・関係課) < ２～１７ページの説明> ※説明内容省略

～以下、質疑応答～
(委員)

観光客増加対応については、ゴールデンウィーク限定の取り組みだったのか。それとも、効果的であったことから現在も続けているのか。今後に向けた取り組みについて、お聞きしたい。

(事務局・関係課)

毎年ゴールデンウィークには多くの観光客が訪れていることから、毎年実施している事業であり、ゴールデンウィークにおける観光客増加対応は今後も継続して続けていく予定である。また、１１月には今年度２回目の歩行者天国の試行的実施が予定されており、その際に同様の対策を行うかどうかについては、現在検討中である。

その他に、資料１の１０ページに記載のとおり、令和６年度オーバーツーリズム対策補助金を活用して作成した観光マナー啓発のポスターや動画があり、継続して観光マナーの周知・ＰＲを行っている。こうした情報は市公式ＨＰや閲覧者が多い観光協会ＨＰ等で掲出している。

(委員)

資料１の１３ページについて、ゴールデンウィークに歩行者天国を実施したことで当日は多くの人で賑わっていた。歩行者天国の結果、ここまで多くの人があるのかという状況に懸念がある。一番街を歩行者天国にしたことで、歩きやすくなり、その結果、人が集中してしまい、逆に観光客を分散することが難しくなるのではないかと感じた。一番街だけではないが、非常に混雑が生じていた。

(委員)

ゴールデンウィークに一番街を通行止めにしたことで、多くの観光客が訪れたが、一番街に車が入れないことで、周辺地域で渋滞が生じたのではないかと。このことで周辺住民や自治会から何か意見や質問はあったか。

(事務局・関係課)

この件について、地元の協議会は、これから開催する予定であるため、正式な意見はまだ伺っていない。

しかし、実施後に各地域の地元の方を訪れたところ、「予想通り混雑していた」、「当日は、家に籠って外に出なかった」といった声をいただいている。今回、5月と11月に実施する歩行者天国の試行的実施については、あくまで試行的な実施として、その効果を検証しながら地域の皆様の声をしっかり聞いて、今後の方針を検討していく予定である。

(委員)

地域の方々の理解は大切であるため、しっかりと対応していただければと思う。

議題

(1) 令和7年度のオーバーツーリズム対策事業について

資料1「川越市オーバーツーリズム対策事業」を用いて説明

(事務局・関係課) <18～34ページの説明> ※説明内容省略

(委員) <32ページの説明> ※説明内容省略

(同行者) <33ページの説明> ※説明内容省略

(委員)

資料1の28ページ「安全安心な歩行環境の確保」について、仲町交差点では、滞留スペースがほぼなく、歩行者が一番街側から仲町側に渡る際、道路間隔も狭いことから、赤信号を無視して渡る方が非常に多い状況が見受けられた。

そのため、仲町交差点からではなく、できれば連雀町交差点まで伸ばし、歩行者の安全を確保していただきたい。

仲町交差点では、車が通行することで大変な混雑が発生しており、事故は起こっていないかもしれないが、いつ事故が起きてもおかしくない危険な状況が毎年発生している。その点について改善をお願いしたい。

特に、仲町交差点から一番街方面に車両が侵入できないことで、東側に右折すると、松江町交差点においても渋滞してしまう状況となる。このような状況から、仲町交差点まで、車両を進入させない方が良くと考えられ、「安全安心

な歩行環境の確保」に繋がっていないのではないかという思いがあるため、この点についても改善に向けて連携していければと思っている。

（事務局・関係課）

交通政策課としては、まずは一番街に観光客が集中しており、車両と歩行者が交錯している非常に危険な状況が課題であると認識している。その改善のために、今年度は春と秋の2回にわたり、皆様に協力をいただいて歩行者天国の試行的実施を行っているところである。春の実施については、現在、効果検証をしているところであり、秋に実施した際の状況も踏まえて効果を検証することで、来年度以降の交通規制のあり方に繋げていきたいと考えている。いただいた指摘については、今後の検討課題としていく。

（委員）

資料1の26ページ「一元的な情報発信」について、非常に重要な事だと思っているが、具体的な対策や番号が記載されていないが、どういうことか。

現在、インターネットで「川越」、「川越 観光」と検索すると、観光協会のホームページが一番上に表示される。観光協会会長から年間400万件のアクセスがある聞いている。1日あたり1万人以上の人が見ている素晴らしいインフラが整っているにもかかわらず、具体的な対策で実施したことが、一元的な情報発信に繋がっていないようであれば、非常にもったいないことだと思う。実施した事業について、しっかり発信していく必要があると考える。

（事務局・関係課）

資料1の26ページでは、「一元的な情報発信」から具体的な対策に線が伸びていないことで、今年度の対策事業がないように感じさせるが、21ページの「テーマ5 一元的な情報発信」において、令和7年度具体的対策として、例年実施している「混雑予測の情報発信」、令和6年度に作製した「デジタルマップの維持管理・充実」を行い、観光協会のホームページに情報を掲載している。今年度、何も実施しないわけではなく、観光協会のホームページの情報をより多くの方に利用していただくため、市の公式X等を通じて周知を徹底していく。このように、情報発信活動の継続・強化に努めていく考えでいる。

（2）各団体のオーバーツーリズム対策の取組みについて

資料1「川越市オーバーツーリズム対策事業」を用いて説明

（委員）＜36～38ページ「取組事例1：川越クリーンアップ委員会について」説明＞

(委員)

本委員会の設立の経緯について、まず令和6年度のオーバーツーリズム対策補助金で、スマートゴミ箱の購入と設置が決定した。このことが、本委員会が立ち上がる大きな要因の一つであった。しかし、それだけではなく、まちの状況として、観光客が出すごみが様々な場所に散乱しており、地域住民からのクレームも多く寄せられている。この状況は中心市街地にとって非常に大きな問題として近年の課題となっていた。

具体的な対策は、各商店街が取り組んできたものの、目に見える効果にはなかなか結びつかなかったため、各商店街は悩んでいた。そのような中、令和6年度のオーバーツーリズム対策補助金により、スマートゴミ箱の設置が実現した。

現状は、スマートゴミ箱の運用が活動の中心となっているが、本員会の活動への協賛者の募集も行っている。資料1の38ページのように、観光協会のホームページにスマートゴミ箱の活用方法や協力企業の情報のページを載せている。本日時点で、こちらに記載されている企業の他にも協賛いただいている企業があるが、まだ皆様の協力が必要な状況である。次年度以降も、この取り組みを広げていくことを考えている。

ここまでの委員会の成り立ちなどの説明だが、この後の説明が重要であるので聞いていただきたい。

税金である川越市の補助金を活用して設置されたスマートゴミ箱の活用を進めるだけでなく、本委員会を活用して、ごみ対策をより良い方向に進めなければならないと強く感じている。今後、本委員会が目指すこととして、まずはごみがどこから出ているのかを考えなくてはならない。各商店が販売しているものが、顧客の手に渡り、その後にごみになっているということを理解する必要がある。

したがって、商店街側にも責任があると感じている。この意識改革が非常に重要である。古くから商売をしている方々もいれば、新しく店舗を開いた方々もいる。古くからいる方々は意識が高い場合が多いが、新しい店舗を立ち上げた方々はまだその意識が十分でないことがある。この部分の意識を変えることが必要であると感じている。

また、現在の委員会の構成員である7商店街間でも、「あの商店街からごみが出ている」等の話がどうしても出てしまう。そのような意識は良くないと感じる。本委員会は、そういった垣根をなくし、地域一体となって活動していきたいと考える。中長期的な対策として活動していく中で、非常に重要な取り組みであると考えている。

(委員)

責任の一端は自分達にあるという、商売を行っている皆様からの潔い言葉で感心した。

それに関して、川越はいつの間にか「食べ歩きのまち」であると、多くのメディアで発信されてしまっている。ごみ問題については、食べ歩きのまちとして、食べ歩いて、ゴミ箱がない、だから捨てるという流れだと思う。「食べ歩きのまち」とメディアで発信されることに関して、商店街としては、どう考えているのか。

(委員)

メディアに取り上げられる際に、「食べ歩きという言葉を使わないでほしい」、「使うのであれば取材を拒否する」という形をとっている。そのため、メディアが勝手に「食べ歩きのまち」として取り上げてしまっているという認識である。商店街の中でも、これを助長する表現を使う商店街があるかもしれない。なるべく内側の人々が「食べ歩き」を助長するような言葉を使わないようにすれば、今後この問題が減っていくのではないかと考えている。

(委員)

そうすると、これはマスコミやメディアが作り上げた川越のイメージとなっている。情報発信の一元化として、公式には「川越は食べ歩きのまちではない」ということを強調し、まちの美化に協力いただきたいというメッセージを発信すべきである。せっかくの機会であるため、ぜひ進めていくのはどうか。また、メディアに対しても、本来の商業者の意向とは異なる形で発信されていることを伝えるべきである。

(委員)

しかしながら、実情としては、川越が「食べ歩きのまち」になってしまっている。これまでは、単位商店街ごとにはそれぞれ対策を講じていたとは思われるが、複数の商店街が一体となって協議する機会があまりなかったのが実情である。そういった議論を繰り広げる場として、本委員会は非常に有効だと考えている。

(委員)

クリーンアップ委員会が立ち上がり、補助金があることで前進したと感ずるため、今後、補助金がなくなった後のことが非常に心配である。

川越には多くの人が集まるため、ある程度の観光税は必要であると考え。それを自主財源として、こういった取り組みに使うべきだと考えている。駐車場を利用する人々から観光税を徴収するような手法を考えなければ、川越に車で来る数は減らないと考えられる。それによって公共交通機関を利用した方がメリットがあることを提示できれば、公共交通機関の利用を促すことができる。パークアンドライドの駐車場に停める場合には観光税を取らない方法を取れば、パークアンドライドの駐車場に停めてから川越観光に訪れるというシス

テムを作ることでもあるのではないか。自主財源としての観光税は、町並みの保存や今後の対策、山車の保全に活用できるのではないか。市としても補助金がなくなった場合でも自分達で事業が継続していけるような取り組みをしてもらいたいと感じている。

(事務局・関係課)

補助金なしではオーバーツーリズム対策事業をしないということではなく、オーバーツーリズム対策事業は非常に重要であることから、継続的にやっていく必要がある。その中で、財源の確保は大変重要なことであるため、財源の確保についても併せて検討していきたいと考えている。

そういった中で出てきたのが、幸町駐車場の利活用である。財源の確保についても検討しつつ、公共交通機関の利用促進など総合的に取り組んでいきたいと考えている。

(委員)

川越クリーンアップ委員会の活動は素晴らしい。以前、浅草に調査で行った際、観光関係の方に「さぞかしごみ問題等でお困りではないか。」と聞いたところ、「あなたは浅草でごみを見かけましたか？」と返され、確かにごみが落ちていなかった。「本当に綺麗だ。」と伝えると、「川越はごみを売っているのか」と言われてしまった。浅草の方は、川越の商店はごみを売って、そのごみが捨てられて、自分の商店が出したごみであることを忘れていてのではないかということを言いたかったのではないかと思う。浅草では、全ての商店が出したごみは商店街で引き受けるのが浅草の心意気だとおっしゃっていた。

川越の商店街もそのような活動をしているのは素晴らしいと思うが、それは「川越クリーンアップ委員会が勝手にやっている」と思われるのはかわいそうである。川越には7商店街以外にも多くの商店街があるため、川越クリーンアップ委員会が補助金を受けて実施している取り組みと言われたいよう、大手のチェーン店に理解してもらうためにも、この補助金よりもさらに上位のところで、明文化する必要があると考える。例えば、次期観光振興計画に「マナー啓発」や「オーバーツーリズム対策」に対しての事業者や住民の心得の明文化が必要であり、持続可能な観光計画ということであれば、補助金で川越クリーンアップ委員会が取り組んでいる事業ではなく、上位のところで、市が認めた取り組みであるということを、宣言することがいいのではないか。

(委員)

先日開催した第2回川越クリーンアップ委員会でもちょうど話題に上がった。只今、協賛金を募っているところで、中心市街地以外の企業に行くと「中心市街地の問題ではないか」と言われることがある。確かに中心市街地のことはあるが、委員会としては、後々は川越全体を見渡した委員会にしていくこ

とを目標として掲げたいと話し合いを行ったところである。ただ、それはまだ時期早々であるということで、まずは中心市街地の環境保全に注視して、実績とともに広げていこうという話をしたところである。

ぜひ皆様と手を取り合ってこの取り組みを進めていければと思っている。

(同行者) < 39～46 ページ「取組事例 2 : DMO川越によるオーバーツーリズム対策について」説明 >

(同行者)

39 ページについて、DMOとは、観光庁では、地域の多様な関係者を巻き込みつつ、科学的アプローチを取り入れた持続可能な観光地域づくりの司令塔となる法人とされている。個人的には、川越では、司令塔という大きな立場というよりも、牽引役として、各関係団体の活動のバランスを取ればと考えている。そのような形で地域の中で観光を通して、地域づくりをしていく組織であると認識している。官公庁では2015年に登録制度が創設され、2018年に一般社団法人DMO川越を設立し、2022年3月に登録DMOとして観光庁に登録された。現在では、全国に300ほどの登録DMOがあり、その中の一つにDMO川越がある。

DMO川越の取り組みとしては、観光振興計画が今年度策定年度であるが、川越の限られた予算やマンパワーの中で、何を重点的に、何を優先して、どのような役割分担で進めていくのか、PDCAを回しながら、効率的に観光地域づくりを推進するにあたり、戦略やマネジメントの牽引役としての役割を果たせればと考えている。

コロナ禍で全国的に観光客が減少する中で、住民にとってはコロナ禍が静けさをもたらしたという感覚があったと考える。住民、事業者、来訪者それぞれに異なる考えがあるが、DMO川越では、それを一つの方向へ導く行動指針の作成に取り組む予定である。

昨年度、商店街や自治会等にヒアリングを行い、ミニシンポジウム、ワークショップ、アンケートを実施した。42 ページに北部市街地を対象に策定した心得のイメージ案を掲載している。ヒアリングで「この地域で大切にしたいこと」「残していきたいこと」を伺った。それをシンプルに三つのワードにまとめ、事業者、来訪者、住民が同じ方向に向かえるような取り組みをまとめた。

43 ページでは、昨年度2月に「これからの川越観光を考えよう」として、自分ごととして捉えていただくことをテーマに、2名の講師を招き2日間で開催したシンポジウムについて掲載している。

44 ページでは、鍛冶町広場で実施した来訪者向けの街角アンケートについて掲載している。午後に観光を楽しんで帰ろうとしている方にアンケートを取ったものである。

45 ページでは、地元とのワークショップについて掲載している。北部市街

地よりも周辺部の住民が多く参加した。

現在、このような取り組みを進めている中で、事業者が来訪者を引き寄せる接点になることから、事業者へのアプローチが重要なポイントであると考えている。今年度は北部市街地から市全域に対象を広げ、地域の資源を掘り起こし、情報を広く周知する仕組みを作ることを考えている。

まとめとして、「川越観光のころえ」という行動指針を来訪者、地元事業者、住民が共有することで、同じ方向に向かっていくと川越のブランド力が醸成され、モノ・コトが磨かれ、ヒト・カネが集まる好循環が生まれ、次の世代に継続していく持続可能なまちになると考える。イメージとして、川越でコロナ禍の時に実施された「越えていこう、川越」事業がある。同じ方向に向かって個々の熱い想いを内外に発信することで、大きなムーブメントを起こしているという良い事例と考えている。

今回の「川越観光のころえ」づくり事業は、観光を通じて、モノ・コト・ヒト・カネを繋ぎ合わせて、地域の活性化を図るイメージでいる。交通事業者様から発言のあった公共交通の促進や、川越クリーンアップ委員会様からも自分達には関係のない他人事とされるといった発言があったが、これらを踏まえ、本事業をきっかけに、各団体の取り組みと連携して、内外にPRしていければと考えている。

(委員)

先ほどの「いかに自分事にするか」という話が非常に響いた。問題は、どう関わってもらうか、関わらせるか、自分事にしてもらうかで、すべての事業で言えることだと感じた。

本日、話に出た浅草の心意気のように、心意気をどう広げるかを具体化することが重要だと思うが、どんなに素晴らしいものを作ったとしても、広がらなければ意味がない。「越えていこう、川越」事業は、皆が喜び楽しんで取り組んでいたが、それが成功の秘訣だったのではないかと考える。

そのため、周知を図り、広げていくことに専念していけば、成功するのではないかと考えている。

(事務局・関係課)

本日の意見で出た情報発信、周知は非常に重要なことであり、市としても各事業に生かしていきたいと痛感した。また、店舗が新しく開店する等、状況は時々刻々と変わっていくため、現場の状況にもよく触れ、確認しながら各対策事業に生かしていきたいと考えている。

以上。

出席者一覧				
○懇談会委員				(敬称略)
No	団体・所属名	役職	氏名	備考
1	川越町並み委員会	幹事	小峰 春彦	
2	川越一番街商業協同組合			代理：神田善正
3	鐘つき堂商店会			欠席
4	川越菓子屋横丁会	会長	久保田 淳	
5	川越名店街			代理：笠間美寛
6	仲町商店街	会長代理	松本 勇一	
7	はつかり商店街			欠席
8	大正浪漫夢通り商店街振興組合			代理：新井一芳
9	東日本旅客鉄道（株）川越駅	駅長	小坂 一将	
10	東武鉄道（株）東武川越駅管区			欠席
11	西武鉄道（株）本川越駅管区	管区長	猿谷 宏幸	
12	東武バスウエスト（株）	課長補佐	岡田 正之	同行者：田村明
13	西武バス（株）計画部計画課			代理：江口聡
14	イーグルバス（株）	代表取締役社長	谷島 賢	
15	（公社）小江戸川越観光協会		恩田 美也子	
16	（一社）DMO川越	理事長	京野 弘一	同行者：秋山修志
17	川越商工会議所 地域振興部	部長	江田 哲也	
18	（株）まちづくり川越 総務部兼業務企画部			代理：間志津江
19	国土交通省関東運輸局観光部観光地域振興課	課長	藤田 一弥	同行者：安部郁弥
20	埼玉県産業労働部観光課	課長	関根 良和	
○川越市				(敬称略)
No	所属名	役職	氏名	備考
1	産業観光部	部長	岸野 泰之	
2	都市計画部	部長	吉田 瑤子	
3	観光課	課長	榎本 学	
4	観光課	副課長	関根 英昭	
5	観光課	館長	横山 大造	
6	観光課	副主幹	加藤 剛史	
7	観光課	主査	新井 努	
8	観光課	主査	山田 英司	
9	観光課	主任	仲田 由香里	
10	観光課	主任	中村 翔大	
11	観光課	主事	小林 祥大	
12	都市計画部	参事	横山 馨	都市基盤整備担当
13	都市計画部	副部長	眞野 和幸	都市計画課長
14	都市計画課	副課長	堀江 修一	
15	都市計画課	副主幹	平井 治人	
16	交通政策課	課長	中村 誉	
17	交通政策課	副課長	田畑 和臣	
18	交通政策課	主幹	山本 和広	
19	交通政策課	副主幹	河合 将人	
20	交通政策課	主査	長屋 浩一	
21	交通政策課	主事	大内 万奈	
22	都市景観課	課長	池田 麗子	
23	都市景観課	副主幹	鈴木 勇一	
24	建設部	副部長	吉田 昌弘	道路街路課長